

『恨之介』の背景

高橋昌彦

『恨之介』という作品は、さまざまの素材がもり込まれた物語である。その混沌たる姿が、読者に幾通りかの解釈を可能にさせてきたことは、渡辺守邦氏①のまとめられたこととくである。その中で、背景に慶長という時代を考える点では、どの論者も一致しているし、モデルやテーマとの関わりの中、時代背景を押さえることが欠くこととの出来ない視点であるとも認められている。本稿は、既に言い尽された感のある『恨之介』の時代背景について、もう一度検証し、気が付いた事柄を報告するものである。

1

『恨之介』の成立時期は、女主人公雪の前の年齢計算により、慶長十四年以降であると栗原柳庵が考証、以後の諸家もそれに従っている。また、下限を見てみると、古活字本の存在などから、慶長末元和初年というところで、ほぼ一致をみている。その間、僅か五年

足らずの年月ではあるが、モデル論を含め作品の中に影響を与えた出来事が、文章の端々に認められている。

その嚆矢として提起されたのが、松田修氏②による宮廷密通事件モデル説であった。今日、この事件をモデルとすることは打消されたが、その影を作品中に窺うことは今も生きている。

…文の返事ばかりはと思へども、自然此事漏れ聞え、上の耳に立つならば、自らが事は苦しからね共、そもじを始め奉り、流罪の淵に沈むものならば、草の蔭なる父母の名まで流さむ口惜しさよ。
(傍線引用者、以下同じ)

と言う雪の前に対し、

…譬ひこの事漏れ聞こえ、武士共の手に渡り、水火の責を受くるとも、それ先の世の因果と思ふべし。

と菖蒲の前に答えさせている場面は、慶長十四年に発覚、同年十月には、幕府の手によつて多くの貴族達が、流罪を含め処罰された密通事件を暗示させている。『恨之介』の舞台は、御所でなく近衛公

の屋敷になっており、朝廷の忌諱に触れることを避けたと取ることも出来、「上」を近衛信尹と考える論者もいる。だが、「上」はもう一箇所、文中に出てきており、そこでは「雲の上人たち、上を始め奉り」(巻下)と、天子様の意が相応しい。とすれば、先の「上」も、やはり天子の意味でとるべきであろう。時の天皇は、後陽成帝であった。同じ密通事件をより詳しく扱った『花山物語』³は、その時代設定を一つ前の正親町天皇の代に移しかえている。事件の物語に占める比重もあるだろうが、時代を設定する時に、当代の天皇を憚るといふ意識はあつたはずである。

「恨之介」の設定は、その冒頭にあるように、慶長九年六月十日が発端となっている。慶長九年という年次の積極的な設定理由としては、豊国社臨時祭などに代表される享乐的雰囲気というものが考えられている。また、野間光辰氏⁴の挙げられた、今日モデルとして定着している松平若狭守近次事件が、慶長十一年に起つたということや、先の宮廷密通事件より前の年次を示すことで、モデルとしての色彩を薄めるといふ働きもあつたかもしれない。しかし、いづれにせよ、慶長九年が、慶長十一年や十四年であつても、後陽成天皇の時代であることに変わりはないのである。これらの事件が、直接間接に色濃く作品中に反映していかないにしても、一つの年次を設定したということは、同じ時代の天皇の代が終わった後に、この作品が成立したと考えた方が自然ではないだろうか。つまり、「恨之介」

は後陽成帝退位後に出来たと考えるのである。退位は、慶長十六年三月二十七日であつた。

また、「恨之介」の特質の一つとして、市古貞次氏⁵が、慶長九年六月十日という年次の設定は、当世の物語を意識させるといふ点で、それ以前の御伽草子からの脱皮という新しさを持つということを指摘された。「恨之介」の新しさが、当世の物語として、読者に意識させるものであればあるほどに、当然、当代の天皇を憚るといふ行動に出るはずであろう。とすれば、この物語の成立を慶長十六年以降に考えてみることは出来ないだろうか。

二

「恨之介」における問題の一つに、全体に占める豊臣秀次の記述及びその女房たちの自害シーンの記載に割く分量の多さがある。この箇所は、物語の筋に直接関係なく挿入部的要素が強いとされてきた。雪の前の出自を述べるにあたり、その父親木村常陸介については、ほとんど筆を費やさず、関白秀次謀反より、三条河原における妻妾たちの自害シーンには、殊更に紙面を割いているのである。当然、この箇所をどのように解釈するかということが問題になってきた。野間光辰氏⁶は、

これはおしゃべりな後家の脱線である。というよりも読者に対

する奉仕精神の旺盛な作者の脱線である。
と述べ、田中伸氏⁷⁾は、

雪の前の境遇を語るのならば、むしろ木村常陸守に筆を用いるのが当然であり、この後家にとつても直接の主君であるのだから秀次の妻妾たちの最後を描くよりも常陸守夫妻の最後を語るのが順序であろう。にもかかわらず傍系の話題をとり上げている点にも、また打首による処刑という史実をあえて自害として語られている点にも、作者の意志が特に加わっているように考えられる。

と、作者の意志の反映を指摘し、鈴木享氏⁸⁾は、

最大の挿入部分と見える上巻の秀次事件について見ても、単に雪の前の出自に関連して語り出された脱線譚ではない。主人公たちの悲恋、特にその鮮血に彩られた結末のアナロジイとして、最終的には全篇に大きな影を落していることが知られる。

と、物語のクライマックスとの関係を強く述べている。確かに、この箇所を除いても全体の筋は成立するものの、最後に訪れる雪の前の死とそれに関わる周りの女性たちの自害をひとときわ浮きあがらせる意味で、重要な部分といつてよいだろう。殊に『聚楽物語』などでは、秀次の妻妾の死は処刑であったのに、「恨之介」では、自害にすりかえられているところに、田中伸氏が述べられた如く、作者の意志を読みとることは十分可能である。

だが、果たしてそれだけで、この秀次事件をとりあげた総ての説明がなされたと言えるだろうか。物語の冒頭、慶長九年の設定を施しながら、木村常陸介を親とし、文禄四年を雪の前二歳としたことにより、実際の姫の年齢を計算することで姫十六歳が慶長十四年にあたるということがあらわれてしまったのである。当時の作品の未熟さと言ってしまったら、それまでかもしれない。しかし、この題材を入れた裏に、読者が成程と思うような出来事があったと考えれば、より一層秀次事件を大きくとりあげた理由がわかるのではないだろうか。他の作品に比して、特に多い美女尻しや三味線の胴に描かれた京の名所の説明にもあらわれているように、作者には、自分の持ち得た材料を貪欲なまでに使おうという意図が見えている。秀次事件にしても、自害の情景を組み入れるとともに、秀次に関わるような材料が作者側にあったと考えられるのである。

…十四、十五を始めとして、花のやうなる上臈たちを、三条の河原へ引き据ゆる。あわれなる次第かな。かの中納言殿の御死骸を、三十餘人の姫たちに、これを御覧候へとて、引向けて見せければ、(中略)御死骸に抱き付き、いづれも涙にむせび給ふ。

話は、上臈の一人おこほの方を中心に、その後、姫たちの自害へと展開していくわけである。文禄四年(一五九五)より、慶長九年(一六〇四)までは十年余り、決して遠い時代の出来事ではなかつ

たかもしれぬ。作品成立の下限とされる慶長末年から遡れば、その間二十年。当時の時の流れと今とを一概に比較することは出来ないだろう。しかし、時代は、豊臣より徳川へと大きく傾き、しかも幕府による朝廷へのしめつけは、次第に厳しさを増してきていた変動の時期であった。然れば、作者が『恨之介』を書くにあたり、身近に秀次の一件を思い出させる出来事が起つたと考えた方が、時の流れを埋める意味で自然なことのように思われる。結論から先に言えば、その出来事とは、角倉了以による高瀬川開削工事にもなう秀次の首塚再興と、慈舟山瑞泉寺の創立であると考える。高瀬川の工事については、

慶長十三年、京都大佛殿御造営二付、大材木牛馬の運送なりかたく、了意光好に命せられ、京都加茂川の水を堰分け、新川をつけ、右の材木を引上る、よりにて十六年より、伏見より二條まで、高瀬船通行す。(「角倉了意家傳」・「大日本史料」)

と、慶長十六年という時期が残っている。より詳しく知るために、林屋辰三郎氏『角倉素庵』をそのまま引かせていただく。了以の宗教的事蹟を述べたところで、

…高瀬川開疏のしごとの間に、三条河原に眠る前関白豊臣秀次の菩提を弔い、慈舟山瑞泉寺を創立したことだ。(中略)その(秀次)首級も妻妾らの遺骸も、河原に設けられた壙穴に投ぜられ、塚の上に「秀次悪逆塚、文祿四年七月十四日」と刻した

石塔が置かれ、当時行者順慶なるものが草庵を結んで菩提を弔っていた。しかしその後順慶も歿して草庵も失せ、洪水のために塚は崩壊して、全く荒廃に委ねられていた。高瀬川を掘り進んでここに至った時、了以はその墓所の再興を企て、帰依する僧立空桂寂と相談して遺骸を集め、石塔の悪逆の二字を削り、その上に石塚を立て、非運の妻妾、幼児にも法名を授け、誓願寺中興教山上人を導師として、厳かな供養を修した。了以はさらに大仏殿建築の遺材、聚楽第の建物を請いうけて、桂寂を開山に一寺を創建した。慈舟山瑞泉寺である。

と、その間の経緯を記している。鴨川は、白河法皇をして心に従わざるもの一つに数えられた瀑れ川。遺骸も塚もその形をとどめていなかったことは想像に難くない。瑞泉寺の由緒については、

慈舟山と号し慶長十六年の開創。角倉了以により、文祿四年八月二日に三条河原で歿した豊臣秀次の一族三九人の塚前に一寺を建立し、秀次の法名をもって山寺号を名づけた。

(「全国寺院名鑑」)

と、同じく慶長十六年の開創であることがわかる。慶長九年に設定した『恨之介』には、この塚や寺にふれた記述を拾うことは無理である。だが、秀次の切腹及びその妻妾たちの自刃に、作者の好意的筆致を読みとることができるとはなからうか。史実を曲げて、河原者たちによる妻妾たちの処刑を自害に書き改めた背景には、先に

もふれた雪の前の死とその周辺女性たちの自刃をより鮮明に浮きあがらせる効果と共に、田中宏氏が指摘するように、美化するという働きも当然読みとることができよう。おこぼの方の毅然とした死に向う態度。そして、それを見守る姫たちの態度。

…その後おこぼの仰せには、「いづれも念佛し給へや」と言ひもあへず、衣の下より守り刀を抜き出し、切先を衝へつ、「南無阿彌陀佛」を最後にて俯し給ふ。残りの姫たち御覽じて、「あら涼しの最期や」と、我もくんと御自害し給ふなり。この姫たちの有様を譬へん方も無かりけり。心の猛き武士も、これにはいかで勝らんと、貴賤上下をしなべてあはれと言はぬ人も無し。

文中に描かれた潔さと大きな同情。そこに、作者の好意的感情を汲みとることは充分可能なはずである。了以の行なった秀次一門の菩提を弔うという行為は、まさしく、三条河原での出来事を思い出させ、物語中に組み込むべき材料ではなかったろうか。

ストーリーには、大きく影響せず、むしろ不審さえ抱かせるような、木村常陸介の記述の少なさに比しての三条河原の場面に割くスペースの多さ。その理由の一つとして、このような角倉了以の秀次畜生塚再興にまつわるエピソードが、作者と読者の共通の話題としてあった。そして、それが作品中に組み入れられたと考えることができるのではあるまいか。

三

この他にも、既に紹介され指摘されている事柄をも含め、物語中に生かされた材料はいくつか考えられよう。

早くに松田修氏によって指摘されたように、雪の前の恨之介にあてた手紙の謎を解く「細川玄旨に使はれし宗庵と申せし人」物について、細川幽齋門下の宗佐が考えられてきた。そして、この人物が宗佐と号したのが幽齋没後であることから、作品の成立を慶長十五年八月二十日以降とすることも出されている。宗庵が宗佐であるという確証は何もないが、実在の人名を憚るという視点に立てば、モデルとして適当な人物であると言えるかもしれない。

また、恨之介を見舞った友人たちの口を通して、「いづくいつ方にも、辻斬にもや逢ひなん」と言わせている。前田金五郎氏の頭注は、辻斬について「当時流行し、千人斬を企てる者もあった。」と付している。「大日本史料」を丹念に追いかけていくと、慶長十年六月十五日にも辻斬の記事が見えるが、慶長十五年には、五月十八日、壬戌、夜前辻切有之云々、近日所々有之由有風聞と「孝亮宿禰日次記」を引くと共に、

○三月及ビ七月ニモ、辻切ノ事アリ、便宜左ニ合致スと合わせて記されているのが見える。これらの記事によって、この

時期に辻斬が多発していたことがわかる。

豊国社臨時祭について見るならば、慶長九年の秀吉七回忌に次いで、慶長十五年には、十三回忌の臨時祭が催されている。慶長九年の祭礼は、「豊国臨時祭礼凶屏風」(徳川黎明会蔵)などに代表されるように、町組が風流を尽し、群舞する独特の躍動感で満ちあふれていた。それが、六年後の十三回忌の臨時祭となると、先の祭礼のような風流の乱舞の記述を見ることはできなくなってくる。

…秀吉の年忌ごとに行なわれるはずであった豊国社の臨時祭礼は、こののち慶長十五年(一六一〇)の十三回忌にあたっても催されたが、もはや前回のとき盛観はなく、十七回忌の臨時祭は企画されながら幕府の介入によって延期されそのまま大坂の陣に突入、ついに実現をみることなく終わった。¹²⁾

慶長十年に、家康から秀忠に將軍職が移り、翌十一年には、大規模な江戸城の増築工事が諸大名の手伝普請によって行なわれた。豊臣家の衰勢はもはや明らかであった。そして慶長十九年に予定されていた十七回忌の臨時祭は延引させられたまま、豊臣氏は滅亡するのである。同じ十九年四月には、豊臣氏打倒の口実となった方広寺大仏殿の梵鐘ができあがり、七月には「國家安康」の句をめぐる鐘銘事件がおこったのであるから、延期させられたのも当然であったろう。

作者の頭の中には、京の町全体が興奮のるつぼと化した慶長九年

の祭礼のイメージが、その後の祭礼との比較によって、より一層強く表われてきたのではなかったろうか。物語冒頭の時代設定は、後の小規模な祭礼を体験したことで、更に強い思い入れを感じるこゝが出来ると思われる。

慶長十五、六年という年次を中心に、その時にあった出来事を拾いあげてきた。慶長十六年、三月二十八日には、家康と秀頼が二条城で会見。形骸的ではあるが、平和が保たれることとなった。そんな危うい雰囲気の中でこそ、「恨之介」は成立し得るのではないだろうか。

「恨之介」の作者が、何者であるか判然としていない。近衛公に近い人物ではという説も出されているが確証のない状況である。ただ、作者が、自分の知識や手持ち材料をこの作品につめこもうとしたのは明らかであり、その意味でも、この時代をもう一度検証し、その背景にあった事件が、作品に反映しているかどうかを確認する必要があったことは当然の手続きであつたらう。

直接、作品の表面に出こない出来事でも作り手と読み手の共通の話題の中で、当時の人々の記憶にある事柄が作品に生かされ、それが書き手の意識にあつたればこそ、「恨之介」は、いろいろな要素を含んでいたと考えられるからである。

注

- 1 「恨之介——古さと新しさと——」（国文学解釈と鑑賞 昭55・9）
- 2 「うらみのすけ」をめぐって——假名草子から浮世草子へ——」（国語
国文 昭30・12）
- 3 古典文庫刊、近世文芸資料？「初期假名草子集」所収。
- 4 鑑賞日本古典文学「御伽草子・假名草子」中の「恨の介」解説。
- 5 「假名草子について」大東急記念文庫文化講座シリーズ第一巻。
- 6 4に同じ。
- 7 「うらみのすけ」の発想をめぐって」（国文学研究 昭40・10、後に
「假名草子の研究」に所収）
- 8 「恨の介」の主題と構成」（国語と国文学 昭56・11）
- 9 「朝日評伝選」19。
- 10 「恨の介」と「竹斎」（その二）」（文学研究 昭42・12）
- 11 2に同じ。
- 12 京都市「京都の歴史」4。
- 13 水田潤氏「うらみのすけ」の文芸構造」（「假名草子の世界」所収）

※なお「恨之介」の引用はすべて、日本古典文学大系「假名草子集」所収の
ものによった。底本は古活字十行本。